

辣腕上司の極上包囲網
～失恋したての部下は、
一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。～

当麻咲来

Sakuru Touma

目次

辣腕上司の極上包囲網

↳失恋したての部下は、

一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。
↳

美味しくて蕩けるように甘い蜜月を

書き下ろし番外編

モーニングシックネス・ラブソディ

辣腕上司の極上包囲網

く失恋したての部下は、

一夜の過ちをネタに脅され逃げられません。
く

プロローグ

「和泉さん、試作品のアンケート結果、どうなっている？」

席で別の仕事をしていた和泉紗那は書類を持って、商品企画室長の渡辺隆史の席に向かう。

「データ、先ほどまとめ終わりました。確認いただいて問題なければ、週明けの会議の資料は今日中に準備します」

そう言って報告書を渡すと、隆史はメールを打っていた手を止める。ちらりと紗那の服装を見て、何か言いたそうに一瞬眉根を寄せた。

（な、なに？）

思わず身構えてしまう。今日は金曜日でこのあとデートの予定があるので、いつもより少しだけ華やかなワンピースを身につけているのだ。

だが当然ながら紗那の服装について何か言われることはなく、隆史は紗那が用意した資料に目を通す。紗那は祈るような思いで、書類のチェックをする隆史の表情を観察し

ている。

（室長、お願いだから、今日だけはややこしい指摘をしないでっ）

紗那が勤めているのはミナミ冷凍食品という食品メーカーだ。両親共働きの家で育ち、幼い頃から、妹と弟のお腹が空けば冷凍食品で自分も含め三人分のお腹を満たすという生活をしてきた。だから紗那は、子供でも安全・簡単に美味しい食事を作る手助けをしたいという夢を持ってミナミ冷凍食品に就職した。

念願叶って三年前から商品企画室で勤務している。隆史は若くしてその商品企画室の室長になった辣腕上司で、チェックは厳しい。

「和泉さん。ちょっといいかな。ここ、数字が入れ替わっているようなので確認して修正を。あとこっちは数値を可視化したほうが説得力が増すので、グラフを挿入してください。ああ……過年度での数値の変移を確認するために、過去のデータの追加も必要ですね」

短時間で書類にすべて目を通したらしい。他にもいくつか細かい点を指摘されたが、思ったほどややこしい修正がなくて、ホッとした紗那はべこりと頭を下げる。

（この程度で終わって良かった……）

隆史は、親会社であるミナミ食品から冷凍食品部門の強化のため、子会社であるミナミ冷凍食品に出向してきている。人当たりが良く穏やかだが、仕事が関わると非常にシ

ピアで、そのお眼鏡にかなわない書類は即刻突き返されるし、企画書は微細でも穴があれば突っ込まれる。

隆史が商品企画室長になった二年前には、まだ三十歳を超えたばかりという若さに、ベテラン社員を中心にあちこちから異論が出た。

だが最初に立ち上げた企画『贅沢チルド』シリーズは、冷凍食品ではなかなか実現できなかった本格的な味と高級志向のラインナップが好評で、ネットの口コミから火がつき、マスコミなどにも取り上げられる人気シリーズとなった。

現在『贅沢チルド』シリーズはミナミ冷凍食品の看板商品となり、今まで棚がなかった大手スーパーやデパートなどにも商品を納品できるようになった。結果として隆史は実力で社内の批判を封殺した形だ。

もちろん紗那も上司として、隆史のことは尊敬している。その分、彼の前ではミスがないように警戒して仕事をしているので、なんとかやりこなせているが、後輩の金谷里穂などは、ことあるごとにミスを指摘されている。手に負えなくなるとすぐに紗那に泣きついてくるため、紗那は自分の仕事以外でも仕方なく残業をする羽目になっている。（まあ里穂ちゃんは書類作成とか、地味で面倒なことになると途端にいい加減だからな……）

だが妹弟がいる紗那は、甘え上手な里穂に懷かれると断れない。その調子で里穂は紗

那以外にも周りに甘えまくっているが、何故か隆史のことだけは毛嫌いしており、普段から『うるさいオッサン』呼ばわりしている。

（渡辺室長には、里穂ちゃんの『愛嬌でなんとか乗り切る』スタイルは通用しないっばいからなあ……）

まあ入社二年目、二十代前半の里穂から見れば、十歳近く年上の隆史はオジサン枠なのかもしれない。けれど、二十八歳の紗那から見れば、隆史がオジサンと呼ばれるのは少し可哀想だと思う。というか、自分もあと二年で三十歳になるし、里穂のような子たちから、近いうちに『うるさいオバサン』などと呼ばれるようになるのかもしれない。

その前には結婚したいなあ、などと今日のデート相手の顔を思い浮かべながら、紗那は書類作成しているらしい隆史の様子を見る。

隆史は一般的に見て、容貌が整っている。可愛い系の男性が好きで紗那からすると、クールでキリッとした顔立ちや、スッキリした目元はあまり好みではないものの、スタイルが良く、服装のセンスも良いし、鬼上司の顔を知らない企画室以外では、密かに『企画室のエース』に憧れている女性が多いようだ。

（ま、外面は良いもんねえ……）

だが企画室ではなかなか厳しい上司の上に、チェックされるミスも改善点も、毎回の確で、ぐうの音も出ないため、なおさら辛い。だが紗那のような愛想のない相手でも、

里穂のような愛嬌^{あいぎょう}の塊^{かたまり}のような女子でも、対応が平等なのはきつと美点なのだと思う。戻された報告書をちらりと見る。グラフにするにはもう一度、データの見直しをしないといけないだろう。目の前の時計を見ると終業まであと二時間。

(まあ、ちょっと面倒ではあるけれど……)

就業時間中に書類を修正して隆史の了承を得て、週明けの会議に間に合わせなければ。紗那は小さく拳を握り、自分に気合いを入れる。

(よし頑張るぞ。今日は勇人と久々のデートだから残業は絶対にしないもんね！)

一人で鎮くと、紗那はデータを保存しているパソコン画面を開いた。

なんとか仕事を時間内に終わらせたものの、退勤間際に隆史に声をかけられて、十分ほど遅れてしまった紗那は大慌てで喫茶店に飛び込む。

「ごめんね。会社を出る直前、ちょっと呼び止められちゃって……待った？」

田川^{たがわ}勇人はそんな紗那を見上げて、複雑そうないつもと違う笑みを浮かべた。

よく待ち合わせに利用しているこの喫茶店はお互いの会社の中間地点となるビルの地下にある。普段から客が多くなく、それでいてコーヒーが美味しくて、ウッディなイ

メージで統一された落ち着いた店内は、二人のお気に入りの場所だった。静かにかかるジャズの音楽を片耳で聞きつつ、紗那は遅れてしまったことをわびるように頭を下げた。「……いやまあ、そんなに待ってないけどさ。……紗那は相変わらず忙しそうだね」子犬のような可愛い顔立ちをしている勇人はそう言うのと、不満げに鼻を鳴らす。付き合って三年になる彼と今日は一月ぶりのデートだったのに、遅刻してしまった。付き「ごめんなさい。金曜日だから、退社前に色々と声かけられちゃって。……勇人もこのところ忙しいみたいだったし。……ところでお母さんの体調はどう？」

一年付き合った後に同棲するようになって二年。一緒に生活していたから、お互い忙しくて顔を見ない日はなかったのだけれど、勇人の母親の体調が悪いということで、ここ一ヶ月半ほど彼は東京近郊の実家から仕事に通っており、顔を見るのも久しぶりだ。だが看病のために実家からの通勤をしているわりに彼は元氣そうに見えた。

「うん、まあ……大分良くなってきたんじゃないかな」

「そう。それは良かったね」

お互いの両親に挨拶^{あいさつ}を済ませているため、彼の母とも面識がある。優しそうな彼の母の顔を思い出し、ホッとして紗那が笑みを浮かべる。だが勇人は唇を引き締めたまま、何も言葉を発しなかった。

しばらくして店員がコーヒーを紗那の前に置いて立ち去ると、ようやく勇人は大きく

息を吸って、それから決意を固めたように紗那の顔をまっすぐ見つめた。

「ずっと……話さなきゃ、って思ってたことがあって」

普段の軽い口調と打って変わった真剣な声でそう告げる。

（もしかして……改めてプロポーズ、とか？）

紗那は彼の不在の間、同棲している部屋に戻る度、勇人がいない寂しさを感じ、彼の存在の大きさを再確認していたところだった。だから勇人から、『話したいことがある』と今日呼び出された時、同棲して二年になったことだし、具体的に結婚の話になるのではと思い込んでいた。

「お互い忙しくて、このところすれ違いばかりだったからさ……」

勇人はそう言いながら視線を紗那の頭の後ろ側にある柱時計に向ける。

「……なあと、どうしたの？」

そわそわして緊張している様子の勇人を勇気づけるように微笑んで、紗那は話の先を促した。

「あのさ、紗那。——俺と別れてくれないか」

「……え？」

正式なプロポーズ待ちのつもりだった……それなのに。

（ちよ、ちょっと待って、今、この人なんて言った？）

プロポーズを期待していた心と、別れてくれという彼の言葉のギャップに瞬間、紗那の脳の活動が完全に止まってしまふ。

（……今、別れてくれて……言われたんだよね）

数刻の間があつて、ようやく紗那の脳に、彼の発言の意味が伝わってくる。驚きのあまり呆然と勇人を見ていると、彼は口火を切ったことでホッとしたのか、続けざまに口を開いた。

「ここ一ヶ月、紗那と離れたら凄いい気分が楽になった。お前はいつも仕事最優先だし、一緒に住んでもあんまり家事もしてくれないしさ。俺、それがずっと嫌だったんだよね。結局俺は、自分のことを最優先にしてくれるタイプの女が好きなんだってよくわかった。お前というのと、あれをしろ、これをしろとうるさくて自分の家なのに自由がなくて疲れるんだよ」

（どういうこと？ 家事ってほとんど私が一人でしていたんだけど……）

彼の言っている意味がわからない。勇人がしていた家事なんて、せいぜい燃えるゴミの日に、マンションの集積場にゴミを出すのと、頼まれた買い物を持ちがけにするくらいだったはず。

「……じゃあそういうことで、今の部屋、再来月の更新前に契約終了にしたいから、来月いっぱいには荷物を処分してほしい」

「ちよ、ちよっと待つてよ」

慌てて彼の手を掴もうと手を伸ばす。だが、彼はその手を避けるようにして、そのまま席を立とうとした。三年も付き合ったのだ。当然、勇人の一方的な話に納得できない紗那は、二度目の挑戦でようやく彼の腕を掴んだ。

「それってどういうこと？ 結婚する予定でお互いの家族にも挨拶しているのに今更？」

「ああ、それもだ。……うちのお母さんはお前のこと、苦手なんだって。仕事最優先で家庭をないがしろにしそうなタイプは、良妻賢母のお母さんからすると氣にくわなかったみたいだな。確かに言っていることは外れてなかったし」

「……はあ？」

紗那にとつて今の仕事は、積年の夢を叶えてようやく掴み取ったものだ。それは勇人にも話していたし、一生涯、働き続けたいと結婚の話が出た時に伝えている。そのため結婚するなら家事育児にも協力してほしい、家事は半分手伝ってほしいと伝えていた。それだつて家事は苦手だと言いつつ、結局ほとんど手伝っていないのが現状だ。

「もしかして、お母さんがそう言ったから、私と別れるの？」

「それもあるけど、それだけじゃない。とにかく俺はお前とは別れたい」

それだけじゃない方の理由が気にかかるんだけど、と言おうとするが、勇人は紗那の顔を見ずに、またちらつと時計に目をやった。なんで時間を気にしているのか、と思い

つつ、紗那は逃げようとする勇人の手をさらに強く押さえ込む。

「もうちょっと納得できるように説明してよ。家事分担が気にくわないのなら話し合えばいいじゃない。そうじゃなくてなんで、いきなり別れ話にするの？」

紗那が勇人の顔を見て、声を上げた瞬間、勇人は紗那の向こう、店の入り口の方へ視線を向け、あつ、という顔をした。慌てて紗那は後ろを振り向く。

「別れる理由。それはあ……勇人くんが私のこと、好きになっちゃったからです」

後ろからかけられた聞き覚えのある声に、紗那はその人の顔を見つめた。すると彼女は紗那の横をすり抜け、勇人の腕に縋りつく。改めてその人物を目の当たりにして紗那は絶句してしまった。

「……里穂……ちゃん？」

勇人の隣に立ち、その腕に自らの腕を絡めて上目遣いで彼を見上げているのは、紗那の職場の後輩、金谷里穂だった。

「勇人くん、ちゃんとやってくれました？ 勇人くんは里穂と結婚を前提に付き合いたいから、紗那先輩と別れるんだって」

グロスを塗った艶々の唇を尖らせて、里穂は勇人の顔をじいっと見つめている。パールの強いインサイドアイライナーを入れて、うるうるの瞳に見せるんです、と里穂がランチの時に紗那に話していたことをふと思出す。

「り、里穂ちゃん。紗那と二人で話をするから待つて待つて言ったよね？」
 「だってえ。六時三十分には待ち合わせ場所に来るって言ったのに、勇人くん来ないから」

それで時計をチラチラと見ていたわけだ。そもそも紗那との待ち合わせが六時で、三十分弱で別れ話を済ませて、その後デートの予定を立てていた、ということかと紗那は理解する。すうっと脳が冷えた気がした。

「金谷さん、貴女、私が勇人と結婚を前提に同棲しているって知っていたのに、ちょっと出したの？」

普段は里穂ちゃんと呼んでいたが、もう親しげに名前を呼ぶ気にはなれない。

里穂と勇人の直接の接点はないはずだ。一度お邪魔したいとさんざん里穂にねだられて、紗那と勇人の住むマンションまで遊びに来た以外には。

(その一回で、連絡先でも交換したの？)

疑問が頭の中でぐるぐる回る。すると里穂は紗那の疑問がわかつていたかのように、嫌な感じの笑みを満面に浮かべて答えた。

「里穂が勇人くんにちよっかい出したわけじゃなく、勇人くんが一度飲みに行こうって言うから。で。何回かデートしたらどうしてもエッチしたいって誘われて、『本当は里穂ちゃんみたいなタイプの女の子が好きなんだ』って。……あんまりお願いされる

から一回シたら、『紗那とは体の相性が最悪なんだ』って言うんですよ。先輩、仕事はできるのに、エッチはすっごく下手なんですわね」

めっちゃめっちゃ良い笑顔で職場の後輩にそんなことを言われて、紗那は頭の中が真っ白になって何も言い返せない。

「でね。一回里穂とシちゃったらあ、勇人くんはエッチの下手な女とは結婚したくない、とか言い出して。でも里穂とちゃんと付き合いたいのなら、先輩とはちゃんと別れてねって言ったんです。当然ですよ」

舌っ足らずの可愛らしい口調で言いたいことを言うと、里穂は絶句している紗那に向かって満面の笑みを浮かべた。

「紗那先輩。仕事がちよっとぐらいできても、彼氏に振られるとか、先輩も可哀想だなって思ったんだけど。でも勇人くんは、エッチが下手な女とは絶対別れるって言うって。だから里穂のことがなくても、別れるつもりだって言うから」

『ねっ』と同意を求めるように勇人を上目遣いで見上げると、彼は余計な事ばかり言う里穂を止めるどころか、一瞬^{まじ}瞞^{まどろ}を下げて頷き、偉そうに言い放つ。

「まあ、エッチ云々はともかく。お前が自分の仕事ばかり優先したから、気持ちが離れたってこと。もともとお前が俺の事を好きだって言うから付き合っただけだし。……まあ具体的な結婚話までは進んでなくて良かった。とりあえずあのマンションは来月末で

俺、出るから。お前もさっさと荷物移動させろよ。……じゃあ、そういうことで！」

それだけ言うと、勇人は里穂を連れて店を出ていこうとする。だがわざわざ足を止めた里穂が振り向き、紗那の顔を見て、小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「先輩って、自分から勇人くんに告ったんですね。里穂は勇人くんから告白されたんですよ。昔っから言うじゃないですか。恋愛は惚れた者の負けって」

「そんなあ。じゃあ俺が里穂ちゃんに負けたってこと？」

「ふふふ。どうだと思えますう？」

「いやいやと会話を続ける二人は、シヨックを受けている紗那の様子をちらちらと窺いながら、底意地の悪い優越感に満ちた表情を浮かべている。

「もう。仕方ないなあ。いいよ、俺が里穂ちゃんに負けてあげる」

「勇人くん優しい♡ じゃあ、今日のディナーは勇人くんのおごりでね」

「もう、いつも俺がおごっているだろう？」

「うふふ、そうでしたあ」

紗那があつけにとられている間に二人は紗那の存在を完全に無視して、さっさとその場からいなくなり、紗那は片手に持っていた冷めたコーヒーを無意識に飲み干す。そのまましばらく呆然としたあと、はっと目の前のオーダーの紙を見つめて、超現実的なことに気づいた。

「勇人……自分の飲んだコーヒー代すら払わずに行った……」

その瞬間、同棲していた婚約者に振られ、思い出の喫茶店に、一人置いていかれたことを理解する。

「……ってもう、元、婚約者……か。ホント………最低」

ぐしゃりと髪をかき上げて、お腹の奥底から込み上げる毒を吐き出すように、深々と溜め息をつく。今自分に起きたことが現実だと信じたくない。だが、目の前に残された二人分のコーヒー代が書かれた伝票を見て、結婚を約束していた相手に他に好きな相手ができて振られたこと。しかもその相手が職場の後輩だったという衝撃の事実が、じわりと脳裏に染みしてくる。

頭は冷たくて、何故か腹の中だけがグツグツと熱い。

（エッチが下手だと、なんだっていうのよ！）

「……情けなくて、涙も出やしない」

振られた理由がくだらなすぎて、悲しさより怒りが込み上げてきて、紗那はようやく立ち上がる事ができた。

そうして潰しそうな勢いで伝票を握りしめ、そのまま喫茶店のレジに向かったのだった。

第一章 辛辣上司の意外な横顔

とりあえず喫茶店を出て、道を歩きながら同期入社の子に電話をする。

「ねえ。京香、どうしても聞いてもらいたい話があるんだけど、これからちよつと付き合つてよ」

「……私、今帰社途中で、その後定例の部内の飲み会があるから無理なのよ。本当にごめん。週明けに必ず付き合うから！」

電話先の同僚、松岡京香は申し訳なさそうに言つて、紗那の誘いを断る。

「……そか。わかつた。じゃあ月曜日、時間空けてよ」

『了解。週明けにいつもの店の個室でランチ予約しておく。それで足りないようなら、夜も時間取れるように調整するから』

「ありがと。じゃあ仕事頑張つてね」

相手に気づかれないようにそつと溜め息をついて、紗那は頷いて電話を切つた。

たとえ親しい友達でも、どうしても時間を割いてもらえないことはある。たとえそれが婚約者に振られた夜でも。

（仕事中に電話でそんなこと言つたら困らせるだけだしねえ。仕方ないか）

けれどどんな風に振られてしまい、勇人と過ごした家に戻る気も起こらず、紗那はそのまま一人で二軒ほど飲み歩いた。

（なあにが、『エッチが下手だから』だ。そんなにエッチが大事かつ。……ちゃんと私と別れ話もせずに、二股みたいなことして。あんなに節操がないって知らなかつた。あの女も、あれだけ私に仕事のミスを押つけておいて図々しい。……きつと、結婚する前にわかつて良かったんだよね）

そんな風に自分に言い聞かせる。気づくと帰巢本能のように馴染みのバーに足が向いていた。

駅を挟んで会社の反対側にあるその店では、会社の人間と鉢合わせしたことがない。そもそも繁華街から住宅街に入る手前にあつて、目立たない店なのだ。大概の人はそんなところにバーがあるとは気づかないだろう。美味しいものに目がなくて、店探しを趣味にしている紗那が、会社周辺を探索して偶然見つけた、カウンターしかない小さな店だ。

「こんばんは。酔い覚ましに軽めなやつ、何か作つて」

カランとドアベルの音を鳴らし、モノトーンのシックな内装で統一された店内に入り、カウンター前でシェーカーを振るバーテンに声をかける。ふらふらとした足取りでカウ

ンター席に向かった。どうやら夜も遅いため、客は紗那以外には一人しかいないらしい。仕立ての良いシックなスーツの背中をちらりと見て、少し引つかかるものを感じながら、紗那はその客の一つ離れた席に座った。

「和泉さん？　こんなところで珍しいですね」

あまり話さないバーテンダーが小さく頷いて何かを作り始めたのと同時に、横あいから声をかけられて、紗那はハッと隣の男の顔を見上げた。

「……渡辺室長？」

思わず素^す頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げてしまった。

（会社の人が来ないからこの店の常連だったのに、なんでよりにもよって、この人がここにいるの？）

一つ空いた席の隣に座っていたのは、商品企画室長である渡辺隆史だ。

こんな時に直属の上司と会いたくはない。だが入店と共にカクテルをオーダー済みだったから、回れ右して帰るわけにもいかない。酔いを醒^さましたら早々にここから退散しようと、そう思っていたのだけれど……

「そりや頭にくるな！　その女も大概だ」

「ですよ。私もさすがに切れました！　あんな男、こっちから捨ててやる！」

酔っ払うと隆史は砕けた口調になる。それにいつもに比べて饒^{じょう}舌^{ぜつ}で、意外にも人の愚^ぐ痴^ちを聞くのが上手い。紗那は酔っ払った勢いのまま、勇人との出会いから、つい先ほどの別れまでの話を、隆史に滔^{とう}々^{とう}と語っていた。ただしエッチ云々^{うんぬん}の話と、相手の女性の名前は伏せたまままだ。一応同じ課内の人間だから余計な話をすれば、仕事にも支障が出るだろう。

「そんな不誠実な男、さっさと見限ってしまえ。別れて大正解だ」

「ですよー。私も今、心からそう思ってます！」

そう勢い良く叫んだ後、それでも自然と漏^もれてしまうのは溜め息だ。

「……ところで。渡辺室長自身は最近、どうなんですか？」

これ以上グチグチ言うのも嫌になり、話題を変えるため軽い気持ちで相手の状況について聞いてみる。

「……………」

だがその瞬間、隆史は黙り込んでしまった。軽い気持ちだったが、地雷だったのだろ
うかと、チラリと上司の表情を確認する。

「あの……………」

「……最近、出ていかれたんだ……」

そう言うと、隆史はカウンターに肘をついたまま口元を手で覆い、深く溜め息をつく。

伏せがちになった目を隠すように長い睫毛が影を落とす。

容姿が良いとは思っていたけれど、今までじっくりと見たことがなかった彼の、冷たい印象の目鼻立ちが、思っていた以上に整っていることに気づいてドキリとする。

「出ていかれたって……彼女に、ですか？」

「……………」

（こ、これ、思い切り地雷踏んじやった？）

うっかり深掘りしたことを後悔する。

こんな時間まで飲んでいるのだ。紗那同様忘れたいことがあるのだろう。けれど仕事場では冷静で、冷淡な印象だった隆史だが、自分と同じように恋愛したり、落ち込んだりもするのだと、意外に思えてしまった。改めて近くで彼の顔をよく見ると、目の下に薄く墨を刷いたような隈があった。

（もしかして、あんまり眠れていないのかな……）

仕事をしている時は、隙がないから全然そんなこと気づかなかった。そう考えながら彼の話を耳を傾ける。

「このところ忙しかったから、あんまり構ってやれなくて……三年も一緒にいたのに、突然出ていったきりだ……」

そう言うと、彼はグラスの酒をあおる。つられて紗那も目の前に出された軽めのカク

テルを一気に飲み干してしまった。

「わかります。なんか空しいですよね。……そうです、そういう時は飲みましょう！

私も飲みますから。バーテンさん、私にバラライカください！」

酔いを醒ます予定が、追加でウォッカベースのカクテルをオーダーしていた。そんな紗那を見て、隆史も飲み倒そうと思ったのだろう。カクテルではなくてウイスキーのロックを頼む。

「では、今宵の出会いに乾杯！」

会社での顔と全く違う、柔らかな表情で隆史がグラスを上げる。芝居がかった台詞に思わず笑いながら、紗那は隆史の琥珀色の液体が入ったグラスに、自分のカクテルグラスの縁を合わせた。

「……すみませんが、そろそろウチの店、オーダーストップで……」

数杯飲んで酔いが本格的に回り、盛り上がってきたタイミングで、申し訳なさそうにバーテンダーが声をかけてきた。

オーダーの言葉に、テンションが上がった紗那と隆史は目線を合わせる。

「……じゃあ、ウチで飲み直すか？」

「そうですね。失恋した者同士仲良く飲みましょう！」

思いがけない誘いの言葉に、酔いで深く物事を考えられなくなっていた紗那は、満面の笑みで頷いたのだった。

「う。頭……痛い……」

目を開けた瞬間、朝の光が目を射す。一瞬目を瞑^{つぶ}ってから、朝日を警戒しつつ薄目を開ける。

（あれ……ここ、どこだ？）

だが目に飛び込んできたのは見知らぬ光景だ。白くて清潔な空間だけど、どこのホテルだろう。なんでこんなところに泊まったんだろう。……昨日の夜、何をしてたんだろう、と記憶を想起する。

（けど、なんかずいぶん硬い枕だな……）

ホテルなら羽根枕じゃないのか、などと思いながら、寝返りを打とうとするとギシリ、と微かにベッドが軋^{よこ}む音がした。そろそろ朝日にも目が慣れただろうと、眉を顰^{ひそ}めて時間をかけ完全に目を開く。

（——え？）

咄^{とつ}嗟に口に手を押しつけて、声を上げなかった自分を褒めてあげたい。

（ちよ、ちよっと待って……私、本当に昨日どうしたんだっけ？）

隣に男の人がいる。

しかもよく知っている人だ。ふと頭の中に昨日の振られたシーンが蘇^{よみがえ}る。だが失恋のショックもどこかに飛んでいきそうだ。ベッドの隣どころか、ものすごい至近距離に服を着ていない男性がいる。その上、職場でよく見知っている顔だ。けれど絶対にこんな位置関係で一緒のベッドに寝ているはずのない人。

（え、あの、ちよっと。これ……腕枕？）

妙に硬い枕だと思っていたのは、男性の腕だという驚愕^{きょうがく}の事実^{じじつ}に気づく。

（ヤバイ……よくわからないけど、これ、絶対にヤバイ）

とにかく少し冷静に考えたいと、彼の腕の中から抜け出そうとして、次の瞬間、パチリと目を開けた男と視線が交わってしまった。

「あっ……の、そのっ」

何か言い訳をしなければ、と思った瞬間、腕枕の主、渡辺隆史は目を細めて朝の心地良い目覚めを堪能^{たんのう}するかのように、伸びをした。

「あー。よく眠れた。やっぱり腕に重みがあると全然違うな」

その台詞^{せりふ}に紗那は思わず目を瞬^{しじつ}かせる。瞬間、頭の中に昨日の夜の会話が蘇^{よみがえ}ってきた。

『そうなんだ。アイツにいつも腕枕をしてたから、いなくなれてから落ち着かなくて、最近はずっかり不眠症で……』

どうやら彼女がいなくなつて以来、隆史は一人で寝ているらしい。いつも腕枕をして寝ていたから、その重みがないと安心して眠れないのだ、と言つてなかったか。

「そ、それは良かったデスネ」

とりあえず彼の言葉に合う返答をする。すると隆史はいつと笑つて、紗那の頬を指先で軽く突いた。

「……色々あったし、よく寝たら腹が減つたな。とりあえず、飯にしよう」

(色々、つて……私、何やったんですかつ)

その声に慌てて紗那は身を起こす。だが次の瞬間、自分も服を身につけてないことに悲鳴を上げてしまった。

先にシャワーを浴びてきたら、と言われた紗那は彼の貸してくれたバジャマを頭からかぶり、二日酔いの頭痛を抱えたまま、ふらふらと彼の家の浴室を借りることにした。

(つて、よくわからないけど、ここすごく良いマンション、だよね……)

昨日一緒に飲んだバーのすぐ側に自宅があると隆史に言われて、二人で歩いてきた。

確かマンションの入り口には広くて綺麗なロビーがあり、そのままエレベーターで高層階へ連れてこられた気がする。

そういうえば、二年ほど前に駅から歩いて十分くらいのところ、ハイグレードマンションが建つたと聞いた。ここはそのマンションではないか。

(渡辺室長つて……お金持ちなんだな)

ミニミ食品から出向してきている隆史の給料はある程度想像がつく。いくら有能だとしても、こんなマンションに住めるような給料はもらっていないだろう。それにそもそもここは分譲マンションだったはず。ぼうつとしつつ、そんなことを考えているのは、半分頭が現実逃避しているからだ。だがこのまま逃避を続けるわけにもいかない。

(えっと……あの後どうなったんだっけ?)

シャワーを浴び、広い湯船に身を滑らせ、軽く目を閉じる。手を伸ばしたところにボタンがあるから試しに押してみると、ジャグジーが動き始めた。

「どこの高級ホテルよっ」

思わず突っ込んでしまった。

ともかく、昨夜の酒まみれの中から記憶をなんとか抽出しようとする。覚えているのは昨日の勇人の衝撃的な告白と、失礼すぎた里穂の言動。

『エッチが下手な女』という里穂の台詞が、舌っ足らずな音声付きでぐるぐると回る。瞬間、なんとも言えない気持ちが入り込んできた。勇人と一緒にいた三年間、喧嘩もしたけれどたくさん笑った。同棲し始めてからは、お互い大切なものをつつ集めていって、二人で生活を築き上げていった。それが結婚に繋がっていくのだと、そう信じて疑いもしなかった。

けれど彼の紗那に対する本音は『エッチが下手だから別れよう』って、そんなものだ。

『紗那は辛い時にも笑顔でいてくれるから、俺も気づくと笑っているんだ』

喧嘩して仲直りした時に、そう言ってくしゃりと髪を撫でてくれた指先。優しい笑顔。それが……なんでこんなことに……)

一緒にいた時間が楽しかったから、こんな風にしていたら、ずるずると追想の霧に引きずりこまれそう。

「ちがうちがう。——そんなことより、渡辺室長と何があったのか思い出さないと！」過ぎてしまったことを慌てて頭から切り離す。今朝、目覚めた時にお互い服を着ていなかったということは、それなりの何かがあったのだろうか。

(あの状況だもの。やつぱり……しちゃった、んだよね)

シャワーを浴びる前にちゃんと体を確認すれば良かった。二日酔いの頭ではそこまで

頭が回らず、いつものように先に体を洗ってしまった。

「……我ながら、最悪っ」

振られた勢いで、他の男の人とシテしまうなんて。それも相手が相手だ。酔っ払って前後不覚でこうなるなんて、本当に自分で自分が嫌になりそうだった。

そもそも部屋に誘われてフラフラついていった時点で、何があってもおかしくない。

あの時は酔っ払っていてもまともな判断ができなかった、なんて言い訳に過ぎない。しかもその相手が……

(ちよっと苦手に思っていた、直属の上司とかって……)

なんだったら、昨日の夜から全部やり直したい。さっさと振られて、里穂の顔なんか見たくもなかったし、あんな台詞も聞きたくなかった。酔っ払っても適当なところで帰宅して、直属の上司とややこしい関係になんてなりたくなかった。

そんなこんなを考えているうちに、熱が込み上げてくる。いや、ジャグジーで心地良く温まったという物理的な理由もあるかもしれないけど。

(とにかく、これからどうしよう)

まずは謝ってなかったことにしてもらおう。お互い酔っ払っていたし、大人のしたことだ。何より大事な仕事に支障をきたしたくない。

(失恋したし、もう仕事しか心の支えがないんだから、そうするしかないよね)

そう決意した瞬間、ふっと脳裏にフラッシュのように記憶が過る。

エッチが下手だから振られたんです、と爆弾発言をした紗那に、目を見開いている隆史の顔。それから……

『そんな奴のために泣くな。俺が……忘れさせてやる……』

耳元で囁かれた言葉。熱っぽい吐息。熱を帯びたその人に、泣いたまま抱きしめられたこと。

断片的な記憶が蘇る度にカッと全身が熱くなる。

優しく触れる指先と、唇。

彼はどんなつもりでそんな言葉を口にしたんだろうか。わからない……けれど。

「アレは夢の中の出来事。とりあえず……もういい加減、お風呂から出ない」と

風呂を出て、お礼を言って、素早く立ち去る。

何もなかったふりをして、月曜日からまた今までのように、上司と部下として同じチームで仕事するのだ。中途半端な関係で、大切な仕事に支障をきたしたくない。

パシン、と自らの頬を叩いて気合いを入れ、はっと息を吐き出して浴槽から立ち上がる。どうやらお湯に浸かりすぎたらしい。軽く立ちくらみがして、壁に触れて体を支える。

お風呂を出て、着替えていると、扉の向こうから声がした。

「朝飯、作ったから」

その言葉に、逃げ出す作戦が失敗したことに気づき、紗那はタオル一枚のまま、頭を抱えた。

呼ばれてリビングに向かう。既に食事の支度はできていた。リビングに繋がるダイニングはオープンキッチンがあり、どっしりとした木製のダイニングテーブルには美味しそうなパンが何種類かと、チーズにハムにサラダ、ゆで卵まで用意してある。

ダイニングから見るリビングは、窓が大きくて外からの採光が良く、広くて明るくて、とても良い雰囲気だ。だがカーテンがタッセルでまとめられている横に、ちよつと変わったオブジェのようなものがある。

（あれ、なんだろう……キャットタワーみたいな感じだな）

猫を飼っていた友人の家に似たものがあった。猫は高いところから下を見下ろすのが好きなのだと友人は言っていた。ふと友人の家の窓際にあるキャットタワーの上から外をぼんやり見ていた猫の姿を思い出す。ただ、この部屋に猫がいる様子はない。

（昔飼ってたとか、かなあ……）

一瞬、猫について聞こうとして、昨日地雷を踏んで失敗したことを思い出す。
 (元彼女さんの飼い猫だったりしたらややこしいし……何も聞かないでおこう)
 そんな風に紗那が一人で納得していると、不思議そうな顔をした隆史に声をかけられた。

「まあ座って。まずは朝食を食べよう」

その声に慌ててダイニングチェアに腰かける。一枚板を使ったテーブルにはシンプルなチェアが四脚あるが、新品同様で多分、来客がある時以外は使われていない感じがした。ちなみに使っていないのがもったいないほど、座り心地が良い。

「ではいただきます」

隆史が手を合わせるのを見て、紗那も手を合わせる。カフェオレに手を伸ばしたところで、彼はブラックコーヒーを飲んでいることに気づいた。

(……なんで私のところにはカフェオレなんだろう?)

口をつけると、深煎りの濃いめのコーヒーに温めた牛乳を合わせたらしく、砂糖は入っていない。

(これ、私の好きな感じのカフェオレだ……)

「あの……」

彼はコーヒーを飲みながら、何故か紗那の顔を見て柔らかい笑みを浮かべている。

「なんで室長はブラックで、私はカフェオレなんですか?」

「なんでって……紗那さんはカフェオレ好きだろう?」

当然のように今まで呼ばれたことないはずの下の名前を呼ばれて、紗那は思わず目を見開く。驚きすぎて、一瞬何を聞こうと思ったのか忘れそうになる。

「えっと、あの……。あ、そうだ。私カフェオレ好きなんて……言ってみましたっけ?」

「……いつもコーヒーは『ミルク多め、砂糖なし』って言っていただろう? まとめてコーヒーをテイクアウトしてもらった時は、カフェオレ砂糖なし、だったしな」

曖昧に笑った彼は重ねて紗那に食事を勧める。正直食欲はないけれど、用意してもらっているからには手をつけないわけにはいかないだろう。紗那はフォークを手に取り、サラダを口に運ぶ。シャクリと噛むと新鮮な野菜の甘味にドレッシングがほどよく絡む。
 「んっ……これ、ドレッシング美味しいですね。ミナミ食品ホームメイドシリーズの、にんじんドレッシングですか? でも菌ごたえがちよつと違う。何か加えて……あ、これナッツですね……」

顔を上げて隆史を見つめると、彼は目を細めて嬉しそうに笑う。

「さすが紗那さん。……ローストしたクルミを足しているんだ。菌ごたえが良くなるし、風味もいい感じだろう?」

シャクシャクとしたサラダに、にんじんの甘味とビネガーの酸味が美味しいドレッシ

ング。それにナッツの香ばしさと歯ごたえが加わって、レベルアップした美味しさになっている。酒の酔いが抜けていなかった体に、野菜のフレッシュな感じが染み渡ってきて心地良い。

「……室長^ごって、味覚のセンスがいいですよね」

「……この期^{およ}に及んでまだ室長、か……」

ほそりと何かを呟く隆史だが、聞き取れなかった紗那が首を傾げると、息をついて、笑顔で返してきた。

「……どうせ食べるなら旨い方がいいだろう？ 俺は基本的に享楽主義者なんだ」

何かを誤魔化すように彼はそう言うと、旺盛^{おうせい}な食欲を見せつけるように食事を続ける。「享楽主義者^ごって……言い方があれですが。でもほんと、昨日あれだけ飲んだ割にしっかり食べますね。気持ち悪くないんですか？」

「……ああ。紗那さんは……昨夜はそうとう飲んだから二日酔いだろう？ 俺は酒に呑まれるほどは飲んでない」

ずっと目を細めて、隆史はからかうように笑う。恥ずかしさにじわりと熱が込み上げてきた。

（そうだ、大事なことを言わなければ）

「あの、室長。……昨夜のことは申し訳ありませんでした。……全部、忘れてくだ

さい」

必死の思いでそう目の前の上司に向かって言う。うつかり直属の上司と不適切な関係になってしまったのは、自分としても予定外なのだから。

（しかも何があったのか覚えてない辺り、本気で最悪だよな）

だからこそ、なかったことにするために、少なくとも『忘れる』という言質^{げんち}を取るまでは交渉を続けないといけない。

だがそんな紗那の思いをよそに、隆史は唇の端を歪^{ゆが}め、笑顔のような形だけ保って、けんもほろろに言葉を返す。

「悪いが、俺は酒に酔っても記憶はくささないタイプでね」

「そこっ！ ……忘れるのが、男の優しさじゃないんですか？」

「俺はそんな都合のいい記憶力は持っていない。それに昨日は正体を失くすほどは酔っていない」

飄々^{ひょうたう}と言い返されて、フォークを持つ手が震える。紗那は昨日の醜態^{しゅうたい}はほとんど覚えていないけれど、『エッチが下手』と叫んだ記憶はうつすらあるのだ。きつと碌^{ろく}なことをしていない自信がある。絶対に忘れてもらった方がいい。

だったら彼がわざわざ『正体を失くすほど酔ってない』と言ったのは、どういう意味だろうか。ふと昨日のベッドでの光景が脳内にフラッシュ映像のように蘇^{みがさ}って、かあっ

と体の熱が上がってくる。

「……お願いですから、忘れてくださいっ！」

再度声を荒らげて言うのと、彼はムツとしたようにサラダのミニトマトにプスッとフォークを突き刺した。それを持ち上げて、紗那の目の前に差し出す。

「……なんですか？」

「それなんだが……忘れることはできないが、黙っておくことはできる」

つまり色々あったことは覚えているけれど、それを人に言わないでおくつもりはある、ということだろうか。さすがにそれは脅迫きょうはくでしょうか、とまでは口にできない。

「……では、昨日あったことは黙っておいてもいいですか？」

まずはそこが大事だ、とばかりに紗那は隆史に念押しをする。すると彼はニヤリ、と悪そうな笑みを浮かべた。

「そうだな、なら条件をつけさせてもらってもいいか？」

（つて、やつぱり脅迫きょうはくかああああ）

だが完全超人みたいな隆史から見てもリットのある条件なんて、自分に関係するもので何かあるんだろうか、と思う。

（昨日みたいな関係を継続的にとか言われたら……さすがに引くけど、渡辺室長、めちゃくちゃモテるし、それはないか）

首を傾げつつ、相手の出方を探る。

「……条件って、どんな条件ですか？」

「昨日、話したと思うんだが、一緒に寝てくれる奴がいなくなつて、他にも色々気になることが多くて、このところずっと不眠症だったんだ。だが紗那さんが腕枕で寝てくれたせいか、昨夜はぐっすり眠れた。こんなに眠れたのは数ヶ月ぶりだね」

「……はあ」

確かに不眠は辛い。昔ストレスで眠れなかった時期があったからそれはよくわかる。

「それに、昨日紗那さんが自分で言っていたよな。今住んでいる部屋、再来月が更新月で、元彼が部屋を出ていくから、一人じゃ家賃を払えない。早く別の部屋を探さないといけないって」

「……言った気がします」

（確かに『住むところもなくなっちゃう』って愚痴ぐちった記憶は……ある。けど、何を条件にするつもりなんだろう。この人

じいっと相手の様子を窺うかがうようにして視線を向ける。すると彼は悪びれず、にっこりと笑顔を返してきた。

「なら、ここに住んだらいい」

「……は？」

何をこの人は言っているんだろう。思いつきり眉を擧めた紗那の反応は予想通りだったのか、彼は驚きもせずパンを口に放り込む。それを咀嚼し吞み込むと、一口コーヒを飲んで一人で領いた。

「俺は不眠症で困っている。紗那さんは住む場所がなくなるので困っている。……ここまではいいな？」

何が、いいな、だ。むむむと眉根を寄せると、彼はもう少し丁寧に説明する気になってくれたらしい。

「ここは分譲の家族向けのマンションだから、部屋数はそれなりにある。通勤には近くて最適だし、家主が不要だと言っているから、家賃を払う必要はない」

言っていることの意味はわかる。だが、条件を何にしようとしているのかがわからないから不安なのだ。

「その言い方だと、住むところがなくなるなら、家賃なしでここに住んだらいい、って言っているように聞こえるんですが？」

思わずそう尋ねると、彼は真顔で頷く。

「ああ、そういう意味だ。……昨日のことは他の人間には黙っているし、家賃も不要だから、紗那さんにここに住んでももらいたい」

……それはそれは良い話に聞こえるけれど、『条件』がついてくるのだろう、と紗那

は頷かずに続きを促すように彼の顔をじっと見る。

「……その代わりと言っては、弱みにつけ込むようであれだが……」

（やっぱり条件があるんだ。しかも弱みにつけ込むようなのが……）

「……………」

なんですか、と問うかわりにじっと見つめている紗那の視線から、隆史は困った表情を浮かべたまま目をそらす。普段飄々としていた彼らしくない。

「紗那さんには、ここに住んでもらって、俺が頼んだ時には、俺の腕枕で寝てもらいたい」

「……はあ？」

変な声が出てしまった。それは……最初考えた、女性として男性を慰める的な提案かと、思いつきり顔を顰めてしまった。

「いや、あの……そういう意味じゃなくて……」

紗那の表情を見て、疑われたと思ったのか、隆史は慌てて首を左右に振った。

「違うんだ。別に性的な云々って意味じゃなくて。普通に添い寝？ 的な。本気で眠れなくて参っているんだ。先週も毎日二時間以下の睡眠で、正直体力を保たせるのが限界で……。仕事のクオリティが下がって仕方ない。すまない。変なことを言っているのは重々承知している。だが……俺を救うと思って、この条件を呑んでくれないか」

今まで飄々としていた彼に、何故かいきなり両手で拝まれてしまった。そのくらい切羽詰まっているのか。

職場での彼の様子とのギャップに思わず気が抜けた。そういうえば、昨日の夜、間近で隆史を見た時、目の下に隈を作っていたことを思い出した。

「あの……添い寝、だけですか？」

「ああ、別に性欲がないわけじゃないが……今は不眠を解消するのに手一杯で、それは後回しでいい」

あ、そっちはナシじゃなくて、とりあえず後回しなんだ。確かに睡眠とか食欲が満たされないと、人は性欲が湧かないと聞いた覚えがある。とはいえ、昨夜はどっちも満たしてしまっただんじやないかって気もしないでもない。しかし、逆に言えば睡眠に対する欲求は、それだけギリギリのところなのだろう。

紗那は一瞬どうしようか迷う。実のところ、今隆史を中心としたチームでの新企画は、佳境を迎えているのに、ここ最近隆史が精彩を欠いているな、とチーム全員で話していた。

（室長のリーダーシップがチームにとって必要不可欠、なのは確かだし。私も来月上旬までゆつくり家を探している余裕はない）

昨日だって、忙しい中、なんとか時間を作って勇人に会いに行ったのだ。結果は……

振られただけだったけれど。

「少なくとも……望まないことを無理強いはいしない。そのあたりは誠実に対応する。……だから、俺の腕枕で寝てくれっ」

ものすごい真剣な表情で言われて、紗那はあっけにとられてしまった。

「……そこまで、寝不足が辛いんですか？」

思わずそう聞き返す。

「……ああ、ほんとうに寝不足は堪える」

ぼそりと呟くと、ちらりと紗那の方を見て、もう一度深々と溜め息をついた。

「夜は眠れない、ようやく寝付いてもすぐに目が覚めてしまう。目が覚めると色々考えすぎて、また眠れなくなる……。こんなことで悩んでいる自分がみつともないやら情けないやら……」

普段、冷静沈着でスマートに仕事をしている姿しか見ていないし、仕事場ではオシャレに整えられた髪型だから、寝起きでちよつとぼさつとしている頭をぐしゃぐしゃとかき回す姿に、寝不足が堪えている感が強まる。

「わ、わかりました。確かに私も住むところには困っていたので……。先ほどの約束を守ってくれるなら、次の家が決まるまではこちらに滞在させてもらいます」

そう言うと、彼はぱつと表情を明るくした。

〔可哀想に、よつほど寝不足が堪えていたんだな……〕

思わず同情した紗那だが、次の彼の言葉に絶句してしまった。

「じゃあ飯が終わり次第、早速紗那さんの部屋に、荷物を取りに行こうか」

「……は？」

突然の提案に口をあんぐり開けた紗那を見て、隆史はにんまりと笑みを浮かべた。

「元彼が戻ってくる前に、荷物を移動させた方がいいだろう？ 少なくとも今すぐ必要な着替えとか、そういうやつ。車を出すから今から取りに行こう」

そう言われて、呆然としている間にお皿を下げられて、気づくと家に向かうことになっていた。

第二章 急転直下、激動の週末

万が一、勇人と鉢合わせしたらどうしよう？ と心配しなくてもなかったが、マンションに戻っているだろう紗那を氣遣ってか、勇人の姿も里穂の姿もなく、正直ホッとする。

（さすがに、不在だからって部屋に金谷さんを連れ込まれてたら、確実に胃の中のもの、

全部吐きそうな気がするわ……）

「着替えとかは自分で準備するだろう？ 他に大きなもので持っていきたいものはないか？」

そう言われて、部屋をぐるっと見回す。結婚してからそろえようと、あまり家具を買ってなかったのは不幸中の幸いかもしれない。

「私が一人暮らしの部屋から持ってきたのは……」

お気に入りの一人がけのソファや、小さな食器棚、一人暮らししてから買ったちよつと贅沢な調理器具や、オープンレンジなどを指し示す。

「このうち、持っていきたいのはどれ？」

「え？ 今ですか？」

思わず聞き返すと、彼は眉を顰めて紗那の顔を覗き込んだ。

「その新しい彼女とやらが来て、あれこれ触られるかもしれないだろ？」

そう言われた瞬間、その光景をありありと想像してしまつてブルツと体を震わせた。

「そう考えたらできる限り、今すぐ持っていきたいですね」

咄嗟に答えると、彼はそうだろう、と言わんばかりの顔をして頷いた。

「じゃあ、全部持っていこう。部屋数には余裕があるから、一部屋は紗那さんの家具とかの保管に使えばいい。あと、紗那さんは自分の着替えなんかをまとめてくれ」

さらつと言われて再び周りを見回す。

「全部持っていくってどうやって……？」

隆史が乗せてきてくれた車は外国製の高級セダンだ。ここの家具を積める程の大きさはない。

「ああ、業者に連絡する」

なるほど、と一瞬納得しそうになり、慌てて紗那は首を横に振る。

「ちよっと待ってください。それって完全にこの部屋を引き払うみたいに見えるんですけど？」

「だからそのつもりで来たんだが？ またこの部屋に来たいか？」

「いや、来たくはないですけど……」

失恋直後に、同棲解消のために二人で暮らした部屋で荷物をまとめる、なんて一人でやったら果てしなく落ち込みそうだし、そもそも昨日だってこの部屋に一人で戻るのが嫌で、夜遅くまで飲み歩いていたようなものだ。

「ああ、運送費の支払いについては俺がするから安心してくれ」

「え、ちよっと……引越し費用なら、当然私が払います！」

「仕事で付き合いのある業者に頼むから、こっちでする。とにかく何度も来たくないのならさっさと準備を整えてこい。三時間後に車が来るように手配するから、俺に触れら

れたくないものはそれまでに準備してくれ」

そういうえば隆史は仕事で方針を決めると即行動がモットーで、建設的な提案であれば手を止めて聞いてくれるが、意味なく躊躇ちゆうちよしているだけなら叱り飛ばされるのだ。

「はい、了解しました！」

言い方は少しも強くなかったが、叱咤しったされたような気分で、思わず背筋を正してそう答えると、紗那は慌てて部屋に戻り、衣類や他の持っていくべきものを整理していく。

それこそ隆史の住んでいるマンションとは比べものにならないほど狭く、リビングダイニングと、ベッドルームがあるだけの部屋だったけれど、紗那は一瞬手を止めて部屋の中を見回す。

「安いお店で買ったカーテンだったけど、結構お気に入りだったよな……」

二人で量販型の家具店を回って、ちよっと値引きしているカーテンを買った。その時ベッドと寝具も一緒に買ったんだっけ。一人で一緒に眠れるように買ったセミダブルベッドにちらりと視線を落とした瞬間、ベタベタしていた里穂と勇人の姿を思い出し、ぐわっと胸に嫌なモノが込み上げてくる。

「もう、ちゃんと畳まなくてもいいや」

三時間でこの部屋から引越しをしないといけない。時間がないから余計なことを考えている暇はない。

黒いゴミ袋に、どんどん自分の服を入れて運び出す。時間に追われて体を動かしたせいでろうか。普通の失恋だったら感傷的になるかもしれないのに、されたことを思い出すと怒りのほうがずっと強い。

リビングに荷物を移動すると、隆史は紗那が指示した家具から皿などを引っ張り出していた。

「コレどうする？ 持っていくのか？」

そう尋ねられて、友人からもらったものとか特別に思い入れのある物以外は、おそろいの茶碗やコップも全部置いていくことにした。その後、持っていくもの、捨てるもの、置いていくものの選別を行う。まだ引っ越してから二年ほどであったし、大きな物はそれこそ結婚してから買うつもりだったので、引っ越し準備には思ったほど時間がかからなかった。

三時間弱で荷物をまとめ終わると、隆史が手配した業者がさっさと荷物を下ろしていき、感傷に浸る暇もなく荷物を積む。そして今度は隆史の自宅に戻った。

「ああ、そっちの荷物はここの部屋に……」

彼の自宅で荷物の置き場所を指示する隆史の様子にもう何も言えなくなり、呆然と見ていると、業者の人たちは荷物を空いている部屋に収めてさっさと帰っていった。マン

ションの状況を見てなんとなく事情を察したのだろう、次にまた仕事があるのでは、とさりげなく紗那にも名刺を渡していくあたり、さすが隆史が個人でも利用する有能そうな業者である。

「——あ、嵐みたいだったなあ……」

気づくと、紗那と勇人の住んでいた部屋にあった、紗那の大事なものはすべて隆史のマンションに収められていた。荷物を取りに行くという目的では、前のマンションに行く必要は多分なくなっただろう。運び込まれた荷物を見て、紗那ではなく、何故か隆史がすがすがしい笑みを浮かべる。

「これでよし。さて、夕食どうする？ なんか食べに行くか？」

そういえば、そろそろ日が暮れてくる頃合いだが、遅いブランチを取って以来、何も食べていない。声をかけられた瞬間、どっと疲れが出てきて眩暈がしてくる。

「っと、大丈夫？ 二日酔いのあと、そのまま引っ越し作業までしたからな。無茶させで悪かった。……疲れているんだったら、食事は持ってきてもらうようにしようか」

足元がふらついた冷たい水をちびちびと飲んでみると、リビングのソファに座らせる。持ってきてもらった冷たい水をちびちびと飲んでみると、夕食のメニューについて相談されて、適当に頷いていたら、デリバリーで届けてもらうことになっていた。

（強引なんだか、親切なんだかよくわからないな……）

テキパキと動く隆史をぼうっと見てみると、自分でも不思議な気持ちになる。

当然のように再びお邪魔しているが、この家は昨日の今頃までは存在すら知らなかったし、なんだつたら昨日、結婚まで考えていた男性から振られたばかりだ。

「……実感がわかないな」

まるで夢でも見ているような気分になる。

（そうだ。荷物引き上げたって、勇人に連絡だけでもしようかな……）

スマホを取り出す。もしかして昨日のあれこれは嘘だったんじゃないか、勇人からメッセージが来ているんじゃないか、どこかでそんなことを期待しつつ画面を覗き込む。（あ、なんか通知来てる）

慌てて開くが、それは同僚の京香からで、「大丈夫？ 電話で話をしようか？」と氣遣ってくれるメッセージだった。

そして勇人からは何一つ連絡が入っていない。最後の会話は昨日の喫茶店の待ち合わせ前にやりとりしたもののだけで、しかもその内容は、改めて見ると、紗那が色々とメッセージを送っているのに、スタンブや、『了解』程度の素っ気ない返事しかない。

（そういえば、このところそんな感じだったかも……）

元恋人の心変わりにも氣づいていなかったんだ、と落ち込んでメッセージを送る氣力すら失っていると、出前が届いたらしく、隆史がダイニングテーブルの上に料理を並べ

始めた。慌てて立ち上がり、彼の手伝いをする。

「美味しそうですね……」

蒸籠せいろうがいくつも並んでいる。中華にすると言っていたのだけれど、どうやら点心を心に頼んだらしい。ごま油とショウガの香りが漂たなって、ぐうっとお腹が鳴る。

昨日の今日でお酒は避けようと思ってくれたのか、大きな急須に入っているのは中国茶だ。おそろいの小さな湯飲みに、お茶が注がれる。

「次の『贅沢ぜいたくチルド』シリーズだが、点心を中心とした中華料理はどうかと思っていて……。紗那さんの意見を聞かせてくれないか？」

まるで仕事の話のようで、きつと余計な氣遣いをせずに食事ができるようにしてくれているのだらう。紗那は有り難く箸はしを取って、食事を始めた。

「……冷凍の小籠包しょうろんぱうは色々なメーカーが出していて人気ですけど、レンジ調理で食べられるものだと、皮が美味しい状態で提供するのはなかなか難しそうですね……。蒸籠で蒸すのだと手間がかかるし……」

皮がしっかりとっていて、匙さじで口に運ぶまでスープが漏れない。スープを包んだもちもちの皮を楽しみ、口に入れた途端に溢れ出す熱々のスープと小籠包しょうろんぱうに舌鼓したつづを打つ。

「——っあ、ふ……おいひい……」

熱くて舌っ足らずになった紗那の口調に、隆史がぶはっと笑い声を上げる。仕事場で